おぎんとおさんとまま母

本当の母親死んで、まま母もらったけ、おさんという子ども出来だのやな。そしたっけ、まま母じものは、自分の子のおさんばかりかわいくてかわいくて、おぎんどごなんとかして殺してもんだ、なんとかして消してえもんだて、なんともなんねえ。あまり自分の子と二人、仲良いもんだから、なんともならねくて、あるとき、

「おさん、おさん、おぎんどご晩げ、かまの湯煮立てて、かげで殺すから、だまってれよ。教えなよ」

と言ったものだけれど、仲良いもんだから、

「おぎん、晩げせアッパ、かま煮立てて、おめどご殺すてるから、おめ寝てらようにして、おれどごさ来て二人して寝ってろで」

って二人して寝てらどやな。したっけアッパ。

「そろそろ寝だどろだな」

って思って、湯わかして、おぎんの寝床さ行って湯をかげだど。そして朝まになって、

「おぎん、おさん、飯食」

ったけ、

「ハイ」

「ハイ」

と二人ながら起きてきてあったど。なんと困ったなと思って、学校さ行ぐ時、毒の入った焼飯おぎんさやって、おさんどごさ良い飯やって、おさんさ、

「これ、毒入れだ飯だはんて、おがこれ食うなよ」

ってアッパおしぇでやったけ、学校さ行ってまたおさんが、

「おぎん、アッパこれ毒入れた飯だはんて、おめこれ食うなよ」

って食わねで来たば、

「ただ今」

「ただ今」

「まだ死なねで戻ってきた。なんとしたもんだべ」

ってそう思っていで、こんだあるどぎ、山さ栗ふろいにやったば、おさんさ穴のあがね袋やって、おぎんさ穴のあいだ袋やって、

「栗ふるってこいや」

ってやったば、栗っこ落ちでいでふるったば、おさんが、

「おぎんさぶくなった。おらのえっぺなった。行がねが」

ったば、

「おれなんぼふるってもえっぺなねおの」

おさんが、

「先に行ぐ」

先に行ったば、だんだん暗くなって困っていたば、死んだ母親が来て、

「おれふるってけらな」

ってふるってけだど。

そしているうぢ、このままだばおぎん殺さえでしまうって、二人ながら逃げだのやな。そしたっけこんどその父親が、子どもら居ねって泣で泣で、まなぐもなも腐るだけ泣で、赤ぐはえらがして歩たけどや。

「おぎん、おさん居だならばなーしてこの鉦叩こばやってガーンと叩いで町内だやら国中回ったやら。子どもら、旅館みでだどごさ、めらしっこみたいにして居だば、

「はてな、おぎん、おれのおどみでだな。あれ聞げ、まず話っこ聞げ」

たば、

「おぎん、おさん居だならば
なーしてこの鉦叩こばや
ってガーンと叩いで町内だやら国中回ったやら。
子どもら、旅館みでだどごさ、めらしっこみたいにして居だば、
「はてな、おぎん、おれのおどみてだな。あれ聞げ、まず話っこ聞げ」
たば、
「おぎん　おさん居だならば
なーしてこの鉦叩こばや
ってガーンと鳴る。
「あれおれの父親でねが」
って二人ながら出で行ったば、なるほどそだなて、まなぐみんなは
えらがして、めちゃくちゃでまなぐ、片方ずつ舐めってけだば、パ
ッとあいだどや。